

栽培技術の工夫による鳥獣対策

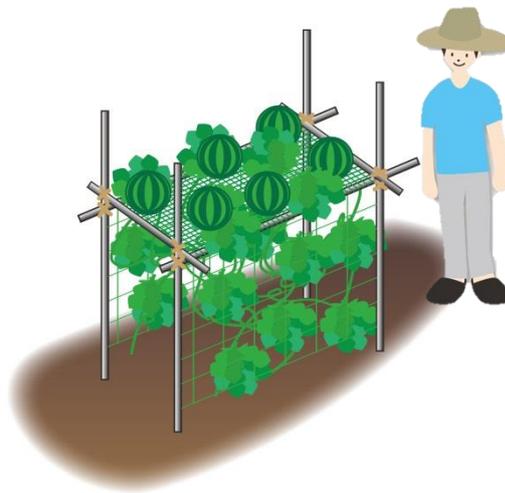
今月は、栽培技術の工夫によって鳥獣被害を防ぐ方法を紹介します。

丈夫な防護柵で囲っても、作物の配置などが悪いと、柵の効果を十分に発揮できません。たとえば、柵のすぐ近くに農作物があると、柵の隙間からサルが手を入れて作物を食べられることがあります。そこで、被害を受けやすい農作物は畑の中央で栽培して、嗜好性の低いトウガラシやシソなどを畑の周囲に植えると、動物への目隠し効果が期待できます。また、スイカやカボチャなどのつる性の作物を柵の近くに植えると、伸びたつるが柵の外側にまで広がって実をつけます。これでは、イノシシなどを誘引して、内側の作物も食べようと柵を壊すかもしれません。この対策としては、つる性の作物は柵から離れた位置に植えるのがポイントです。さらに、直管パイプなどで作った立体的な棚に、実の重みに耐える強さのネットを張って、つるを誘導してネット上に実らせる「立体栽培」にすると、栽培面積をコンパクトにできます。

カキなどの果樹は低樹高に栽培すると、剪定や収穫、防鳥ネットなどの設置が容易になります。また、果樹園などでの最終の草刈り時期を通常の前9月下旬から10月下旬以降にずらすことによって、シカなどの冬季の餌となる緑草の発生を抑えることが出来ます。

このように、作物の配置や圃場管理の工夫によって、鳥獣にとって魅力のない田畑に変えていくことが重要です。

(島根県中山間地域研究センター 鳥獣対策科 菅野泰弘)



スイカの立体栽培